

本書の構成

本書の第Ⅰ部・第Ⅱ部では、世界の諸地域間の交流が限られていた古代から近世までの時期が扱われます。この時代にはそれぞれ特有の自然環境や地理的条件のもとで、言語や宗教を共通の基盤にして社会組織・生産基盤・生活様式が生まれ、各地域独自の文化的枠組み^{わくぐみ}がつくり出されました。こうした枠組みは、外部の新しい文化と接触・交流した場合に、何を取り入れるかを選択するフィルターとなったり、受容した新しい文化を受け入れやすく修正する触媒^{しよくばい}の機能を果たします。長期の過程を経て、それぞれ特有の文化体系をもつ社会が形成されました。もちろん文化的枠組みも時代とともに変化しますが、その変化の速度は政治変動や技術革新などよりもゆっくりと進むので、それぞれ独自の個性をもった社会が形づくられたのです。

第Ⅲ部・第Ⅳ部では、地域間の接触・交流の密度の高まりを受けて諸地域が多様なネットワークで結ばれ、それぞれの地域の内部構造も変容していくという、「世界の一体化」の過程が扱われます。この間、世界の一体化の推進源も、西欧諸国からアメリカ合衆国へ、さらにソ連、日本、中国などへとめまぐるしく移動しているように、一体化した世界の変動はそれ以前の時代より急速です。現在の世界の課題を見出し、その解決への手掛かりを探るには、変動が比較的ゆるやかな各地域特有の文化的枠組みを十分に理解しておくことが必要なのです。それは、これから進む方向を考えるうえで、一種の羅針盤^{らしんばん}となってくれるでしょう。

なお、本書の各部では冒頭に「各部を学ぶ前に」を設け、それぞれの学習にあたって考えてほしい基本的視点や重要な主題テーマをあげています。終わりの「まとめ」では、つぎの部の理解への橋渡しとなるように、学習した時代や地域の歴史的特徴を確認します。さらに、歴史の見方や考え方を多面的に深める一助となるよう、本文では内容にそった問いかけや様々な図版、史料を取り上げています。それらを活用して、歴史への理解を深めてください。

みなさんが世界の歴史を学びながら、そこに生きた人々の楽しみ、喜び、幸せ、悲しみ、怒りを自分自身のものとして思い浮かべ、これから生きていく地球世界に挑戦する気概をいだいて、踏み出してほしいというのが執筆者一同の願いです。

世界史へのまなざし① 地球環境からみる人類の歴史

自然環境と人類の進化……4

世界史へのまなざし② 日常生活からみる世界の歴史

砂糖とコーヒーからみる世界の歴史……8 / 余暇からみえる現代世界……10 / 歴史のなかの家族……12

I 部

諸地域の歴史的特質の形成

15

● 第I部を学ぶ前に……16

第1章 文明の成立と古代文明の特質——18

- 1 文明の誕生……18
- 2 古代オリエント文明とその周辺……20
- 3 南アジアの古代文明……28
- 4 中国の古代文明……30
- 5 南北アメリカ文明……35

第2章 中央ユーラシアと東アジア世界——37

- 1 中央ユーラシア——草原とオアシスの世界……37
- 2 秦・漢帝国……40
- 3 中国の動乱と変容……44
- 4 東アジア文化圏の形成……47

第3章 南アジア世界と東南アジア世界の展開——54

- 1 仏教の成立と南アジアの統一国家……54
- 2 インド古典文化とヒンドゥー教の定着……58
- 3 東南アジア世界の形成と展開……60

第4章 西アジアと地中海周辺の国家形成——63

- 1 イラン諸国家の興亡とイラン文明……63
- 2 ギリシア人の都市国家……66
- 3 ローマと地中海支配……75
- 4 キリスト教の成立と発展……83

第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成——85

- 1 アラブの大征服とイスラーム政権の成立……85
- 2 ヨーロッパ世界の形成……91

第I部まとめ……102

II 部

諸地域の交流・再編

103

● 第II部を学ぶ前に……104

第6章 イスラーム教の伝播と西アジアの動向——106

- 1 イスラーム教の諸地域への伝播……106
- 2 西アジアの動向……111

第7章 ヨーロッパ世界の変容と展開——117

- 1 西ヨーロッパの封建社会とその展開……117
- 2 東ヨーロッパ世界の展開……122
- 3 西ヨーロッパ世界の変容……126
- 4 西ヨーロッパの中世文化……134

第8章 東アジア世界の展開とモンゴル帝国——137

- 1 アジア諸地域の自立化と宋……137
- 2 モンゴルの大帝国……144

第9章 大交易・大交流の時代——150

- 1 アジア交易世界の興隆……150
- 2 ヨーロッパの海洋進出とアメリカ大陸の変容……158

第10章 アジアの諸帝国の繁栄——162

- 1 オスマン帝国とサファヴィー朝……162
- 2 ムガル帝国の興隆……166
- 3 清代の中国と隣接諸地域……169

第11章 近世ヨーロッパ世界の動向——176

- 1 ルネサンス……176
- 2 宗教改革……180
- 3 主権国家体制の成立……184
- 4 オランダ・イギリス・フランスの台頭……189
- 5 北欧・東欧の動向……195
- 6 科学革命と啓蒙思想……199

第II部まとめ……202

諸地域の結合・変容

203

- 第III部を学ぶ前に……204

第12章 産業革命と環大西洋革命……206

- 1 産業革命……206
- 2 アメリカ合衆国の独立と発展……209
- 3 フランス革命とナポレオンの支配……212
- 4 中南米諸国の独立……217

第13章 イギリスの優位と
欧米国民国家の形成……220

- 1 ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動……220
- 2 列強体制の動揺とヨーロッパの再編成……226
- 3 アメリカ合衆国の発展……234
- 4 19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄……238

第14章 アジア諸地域の動揺……242

- 1 西アジア地域の变容……242
- 2 南アジア・東南アジアの植民地化……246
- 3 東アジアの激動……252

第15章 帝国主義とアジアの民族運動……258

- 1 第2次産業革命と帝国主義……258
- 2 列強の世界分割と列強体制の二分化……265
- 3 アジア諸国の変革と民族運動……270

第16章 第一次世界大戦と世界の変容……278

- 1 第一次世界大戦とロシア革命……278
- 2 ヴェルサイユ体制下の欧米諸国……284
- 3 アジア・アフリカ地域の民族運動……292

第17章 第二次世界大戦と
新しい国際秩序の形成……300

- 1 世界恐慌とヴェルサイユ体制の破壊……300
- 2 第二次世界大戦……308
- 3 新しい国際秩序の形成……314

第III部まとめ……322

地球世界の課題

323

第18章 冷戦と第三世界の台頭……324

- 1 冷戦の展開……324
- 2 第三世界の台頭とキューバ危機……328
- 3 冷戦体制の動揺……332

第19章 冷戦の終結と今日の世界……339

- 1 産業構造の変容……339
- 2 冷戦の終結……344
- 3 今日の世界……349
- 4 現代文明の諸相……358

地球世界の課題の探究……364

世界史年表……366

索引……378

世界の自然・世界の気候区分……表見返し

現代の世界……裏見返し

【二次元コード】

本書の以下の頁に掲載した二次元コードから、インターネットを使用した学習ができます。二次元コードの使用にあたって使用料はかかりませんが、通信料がかかります。インターネットを使用する際には、先生の許可を得たうえで使用してください。また、使用にあたっては個人情報の扱いに十分注意してください。

p.21/p.22/p.41/p.61/p.62/p.74/p.87/p.99/p.116/p.123/p.134/p.140/p.147/p.151/p.155/p.165/p.168/p.179/p.207/p.213/p.215/p.239/p.245/p.252/p.259/p.299/p.312/p.314

【本書の使用上の注意】

暦……西暦を使用し、必要により中国暦・ロシア暦などを用いて説明した。

在位・在任・生没……原則として元首は在位・在任年を、ほかの人物については生没年を付記した。

外国語の仮名表記……人名および地名は原語に近づけて表記するようにしたが、慣用の定着しているものはこれに従った。

史料引用……できるだけ必要な部分にとどめたが、前略・後略は特別には記さなかった。また、読みやすく書き改めたところもある。出典は文末に()の形で示した。

自然環境と人類の進化

▶ 人類の誕生を地球46億年の歴史のなかに位置づけたら、どのようなことがわかるだろうか。

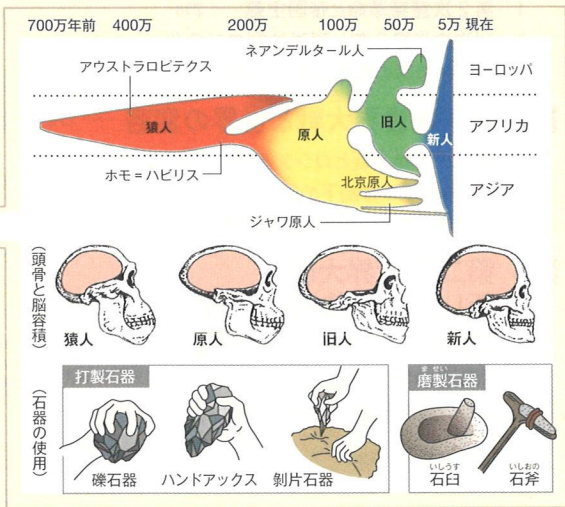
● 自然環境と人類の関わり

5 今から46億年前に地球が誕生して以来、そこ
に生命が現れ、そのなかから最初の人類が出現
するまでには、地球の年齢の大半を占める途方
もない年月が経過した。人類が歩んできた歴史
のほとんどの期間、とくに経済が狩猟・採集や
10 農業に大きく頼っていた時代では、人間の生活
はつねに、気候の変動や火山噴火・地震といっ
た自然災害、さらに疫病(感染症)の流行といっ
た自然環境の圧倒的な影響力のもとにおかれて
きた。一方で、人類は自然環境に適応し、また
15 それに働きかけることを通して知能を発達させ、

きびしい自然条件を克服して生き抜いてきた。
人類が科学技術を用いて自然への働きかけを強
めはじめてから、今日のようにほかの天体に到
達し、あるいは遺伝子进行操作するようになった
のは、たかだかこの100年ほどのことにすぎない。
歴史は、人間の活動だけによってつくられる
ものではないのである。

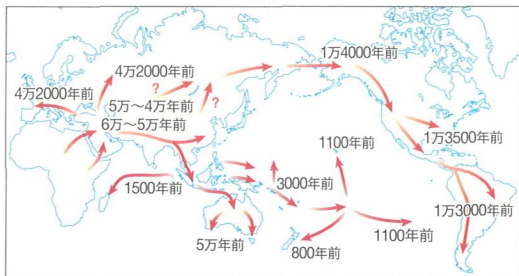
● 人類の進化

自然環境の変化のなかで、人類が進化をとげ
ながら、やがて文字を発明して歴史を記録に残
すようになるまでには、人類の歴史の99%以上
を占める時間がかかった。人類史におけるこの



人類をほかの動物から区別する最大の特徴は、**直立二足歩行**である。それによって大きな脳を支え、前足を手として発達させ、道具を使用するようになった人類は、自然環境の変化に適応するために、知能を発達させながら複雑な進化の道筋をたどった。

最初に出現した人類を猿人えんじんといい、サヘラントロプスSahelanthropus、ロブス①やアウストラロピテクスAustralopithecusなどがこれに属する。猿人のなかには簡単な打製石器だせいせっき(礫石器)を用いるものもいた。地球は約260万年前に、寒冷な氷期ひやうれいきと比較的温暖な間氷期かんひやういきを繰り返す時代に入った。やがて約240万年前、アフリカに猿人げんじんが登場した。ホモ=ハビリスHomo habilisやホモ=エレクトゥスHomo erectus(ジャワ猿人・北京猿人など)ペキンがそれに属し、なかでもホモ=エレクトゥスは、ハンドアックスなどの改良された打製石器と火を使用し、狩猟・採集生活を営みながら氷期のきびしい環境を生き抜いた。さらに約60万年前、より進化した旧人きゅうしんじんが出現した。ヨーロッパに分布したネアンデルタール人Neanderthalがその代表である。旧人は現代の人類とかわらない脳容積のうようせきをもち、死者を埋葬まいそうするなど精神文化を発達させた。彼らは目的に応じて剥片石器はくぺんを使用したり、毛皮を身につけるなどして、氷期に適応した生活を送っていた。



ついで20万年ほど前にアフリカに現れた人類^{しんじん}を新人^{しんじん}といい、われわれと同じ現生人類^{げんせい}(ホモ・サピエンス^{Homo sapiens})に属する。ヨーロッパのクロマニ^{Cro-Magnon}ヨン^{ヨン}人や中国の周口店上洞人などがこれにあたる。新人は剥片石器をつくる技術^{しゅうぺんしせき}をさらに進歩させ、また骨や角^{つう}でつくった骨角器^{こつかくき}を用いて生活をより豊かにするとともに、鮮やかな洞穴^{どうけつ}絵画を残した。新人はまもなくアフリカから広がり、各地の環境に適応しながら、アメリカ大陸を含むほぼ全世界に住み着くようになった。人類がこのように打製石器を用いて狩猟・採集生活を営んでいた時代を旧石器時代と呼ぶ。他方旧人^{きゅうじん}はしばらく新人と共存していたが、約3万年前に絶滅した^{ぜつめつ}②。

①DNA研究によれば、人類がチンパンジーなどの祖先とわかれたのは1000万～700万年前のことだとされる。現在確認される最古の人類がサヘラントロプスで、2001年にアフリカのチャドで化石が発見された。

②新人は旧人の直接の子孫ではなく、別系統の人類であることが近年の研究で明らかになっている。

● 人類と言語

世界各地に^{かくさん}拡散した人類がそれぞれの環境に
適応していくなかで、言語や習慣は多様になり、
皮膚や髪の色といった身体的特徴の違いも現れ
5 た。19世紀以降の欧米では、身長・頭の形・皮
膚の色・毛髪^{もうはつ}といった身体の特徴によって、人
類を白色人種・黄色人種・黒色人種などの人種
にわける考え方が盛んになった。しかし、すべ
10 ての現生人類はただ1つの種(ホモ＝サピエンス)
に属するのであり、したがって人類を人種
によって分類したり、人種間に優劣の差がある
と考えることには、今日では科学的根拠がない
とされている。他方、言語・宗教・習慣などの
文化的特徴によって、人類を民族という集団に
15 わける考え方もある。また、共通の言語から派

生した同系統の言語グループを語族と呼ぶ。

● 世界史の転換点と自然環境の変化

地球は太陽の周りを公転する軌道^{こうてん きどう}の変化や太
陽活動の強弱により、氷期と間氷期を周期的に
繰り返してきた。また、ときにおこる火山の大
5 噴火は、大規模な災害や地球規模の寒冷化をも
たらすこともあった。世界史を全体としてとら
えた場合、こうした気候変動や自然災害、さら
に疫病(感染症)の流行が歴史に刻んだ転換点を、
いくつも認めることができる。

気温が暖かくなると、人類の活動は活発とな
り、それは巨大な帝国や広大な交易圏^{こうえきけん}の成立を
うながすことがある。たとえば、北半球で温暖
化がみられた紀元前2世紀から紀元2世紀にか
けて、地中海沿岸ではローマ帝国が繁栄し、ま
15
→p.78

世界の諸言語の系統分類表

言語は文化的伝統のなかでも重要な要素である。日本語と朝鮮語の帰属^{きぞく}については定説がない。

● インド＝ヨーロッパ語族

- ゲルマン語派……………英語・ドイツ語・オランダ語・スウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語
- イタリック語派……………ラテン語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語
- ケルト語派……………アイルランド語・スコットランド＝ゲール語・ウェールズ語
- ヘレニック語派……………古代ギリシア語・現代ギリシア語
- スラヴ語派……………ロシア語・ウクライナ語・ベラルーシ語・ポーランド語・チェコ語・スロヴァキア語・セルビア語・クロアチア語・ブルガリア語
- バルト語派……………リトアニア語・ラトヴィア語
- インド＝イラン語派……………サンスクリット語・ヒンディー語・ウルドゥー語・アヴェスター語・ソグド語・ペルシア語
- その他の語派……………ヒッタイト語・アルメニア語・アルバニア語・トカラ語

● ウラル語族……………ハンガリー語・フィンランド語

● アルタイ語族……………トルコ語・ウズベク語・ウイグル語・モンゴル語・満洲語

● シナ＝チベット語族……………漢語・タイ語・チベット語・ビルマ語

● オーストロネシア語族……………マレーシア(ムラウ)語・インドネシア語・タガログ語・マオリ語・タヒチ語

● オーストロアジア語族……………ベトナム語・クメール(カンボジア)語・モン語

● ドラヴィダ語族……………タミル語・マラヤーラム語・カンナダ語・テルグ語

● アフロ＝アジア語族

- セム語派……………アッカド語・バビロニア語・アッシリア語・アラム語・フェニキア語・ヘブライ語・アラビア語
- エジプト語派……………古代エジプト語・コプト語

● アフリカ諸語……………スワヒリ語・バントゥー諸語・コイサン諸語

● アメリカ諸語……………イヌイット語・アサバスカ諸語・ユート＝アステック諸語・マヤ諸語・ケチュア語

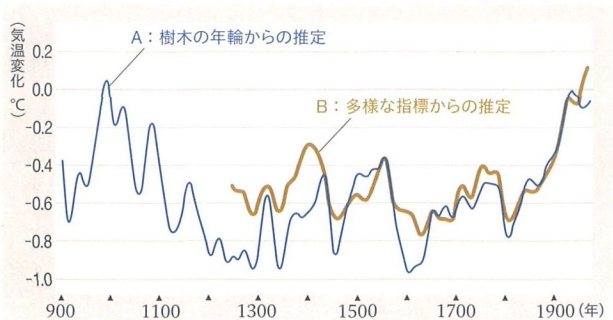
*なお、同じ系統の言語を話す人間集団を呼ぶ場合には、「～語系」という表し方がよく使われる。

た、東アジアでは漢帝国が周辺に支配を拡大した。耕作に適した土地がアルプス山脈の北にも広がり、ヨーロッパのほぼ全域で地中海式農業が営まれるようになったのも、この時代である。

その一方で、寒冷化の波もしばしば地球を襲い、そのたびに人類社会に変化をせまってきた。14世紀頃から世界の多くの地域で寒冷化の傾向が強まり、これは19世紀まで続いた。この時代には氷河が前進し、また、長雨の悪影響が出やすくなった。例えば、14世紀には「大飢饉」と呼ばれる飢饉がヨーロッパ全土を襲い、東アジアでも元朝が水害によって大打撃を受けた。人口は各地で減少し、たびかさなる戦争が社会をゆさぶった。しかし、この過酷な状況を克服する過程で、ヨーロッパでは近代科学が誕生し、農業革命によって食料は増産に転じ、やがて産業革命がおこって近代化が始まったのである。

人類はまた、地震や津波、火山の噴火といった自然災害の脅威にもさらされてきた。紀元79年にイタリアのヴェスヴィオ火山が大噴火をおこし、発生した火砕流は麓の都市ポンペイを壊滅させた。『博物誌』の作者プリニウスは、この時の噴火にあって死去したという。365年の7月にクレタ島付近でおこった地震は大規模な津波を引きおこし、アレクサンドリアなど東地中海の都市に破壊的な被害を与えた。当時のキリスト教徒は、これを神の怒りと解釈して恐れた。さらに、地震と津波がおこした大災害としてもっとも記憶に新しいのは、2011(平成23)年の東日本大震災であろう。

1783年には、5～6月にかけてアイスランドのラキ火山が、また7月には日本の浅間山が、あいついで大噴火をおこした。大気圏に拡散し



900年～1900年における地球気温の変化 (National Academy of Sciences 2006より作成)

た火山灰や火山ガスは日光をさえぎって全世界に冷夏と凶作をもたらし、その影響は数年におよんだ。日本では天明の飢饉が発生して一揆や打ちこわしが広がり、また凶作によって食料不足が深刻になったフランスでは民衆が暴動をおこし、それが1789年のフランス革命の1つのきっかけになったといわれる。

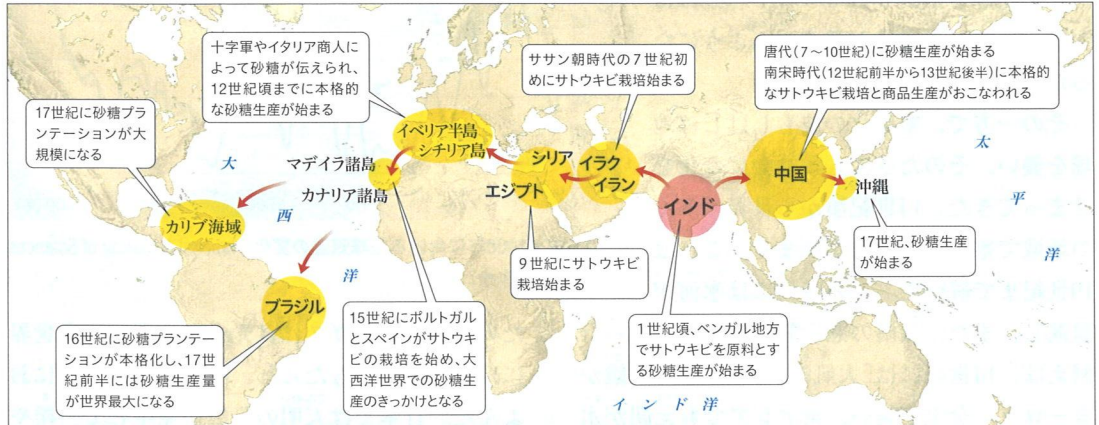
疫病(感染症)の流行も、人類社会の動向と密接なかかわりがある。14世紀にヨーロッパで大流行した黒死病(ペスト)は、モンゴル帝国が成立してユーラシア大陸で東西交流が盛んになったことが原因でもたらされたといわれる。それは寒冷化の影響とあいまって、中世ヨーロッパの支配体制を衰退に追い込んだ。また、1918～20年にかけて世界に大流行したインフルエンザは、第一次世界大戦で兵士が大規模に大陸間を移動したことによって感染が拡大したと考えられている。

地球の自然環境の変化は、このように人類を様々な試練にさらしてきたが、同時に、人類がつぎの時代への新たなステップを踏み出すきっかけも与えてきたのである。

Q▶ 現在、地球の自然環境はどのような危機に直面しているのだろうか。また、その克服にはどのような取り組みが必要だろうか。

砂糖とコーヒーからみる世界の歴史

▶ 砂糖やコーヒーは世界をどのようにめぐって私たちの口に入るようになったのだろうか。



サトウキビ栽培と砂糖生産の伝播

私たちは世界史とどのようにつながっているのだろうか。今が歴史にかわる時を生きているのだから、私たちは時間の流れのなかでつながっているともいえる。また、普段の生活を見渡すと、いろいろなモノを通して世界史とつながっていることがわかる。ここでは、砂糖とコーヒーに注目してみよう。

● 甘味料・薬・祭の品としての砂糖

町を歩けば様々な甘菓子が店頭に並び、また家庭料理にも欠かすことのできない砂糖。この砂糖の歴史を振り返ってみると、イスラーム文化圏が砂糖生産の伝播に重要な役割を演じていたことに気づく。サトウキビを原料とする砂糖生産は、1世紀頃のインドに始まり、東方では唐から明代の中国を経て17世紀初めに沖縄へと伝わった。西方ではイスラーム以前の7世紀初めにイラン・イラクに広まり、その後、シリア・エジプトを経て12世紀頃までに北アフリカからイベリア半島へと拡大した。

砂糖は甘味料としてばかりでなく、貴重な薬

や祭の品としても用いられた。薬としての砂糖は、脳の働きを活発にし、喉や胸の痛みを取り除き、さらには胃腸や肝臓の働きを強化する作用があるとされていた。また、12~13世紀以降のイスラーム社会では、断食月(ラマダーン)になると、毎日、日没後に砂糖入りの甘い料理を食べて体力の回復をはかったという。

● 史料が語る砂糖の生産と消費

12世紀頃までにサトウキビ栽培が下エジプトから上エジプトへと拡大すると、エジプトは砂糖生産の筆頭におどり出た。マムルーク朝時代エジプトの知識人スワイリー(1333年没)^{→p.114}によれば、円錐形の土器を用いて、煮沸した糖汁から黒い糖蜜を分離し、これを繰り返すことによって白砂糖の結晶がつくられたという。またマルコ・ポーロの旅行記『世界の記述』(『東方見聞録』)^{→p.147}は、元の時代に円錐形の土器を用いる製糖法が、エジプトから中国へと伝えられたと記している。

砂糖生産が拡大すると、砂糖の消費もいっただ

んと活発になった。マクリーズィー(1442年没)の『エジプト誌』はつぎのように述べている。

カイロの甘菓子の市場では、毎年ラジャブ(第7月)になると、美しい光景が出現する。砂糖でつくった馬・ライオン・ネコなどの菓子が店頭につるされ、子ども向けに売られる。身分の高い人も、低い人も、家族や子どもたちのためにみながこれを買ひ求める。

(著者訳)

● ヨーロッパへの伝播

エジプトやシリア産の砂糖は、十字軍やイタリア商人の手を経てヨーロッパへと伝えられたが、15世紀になると、ムスリム(イスラーム教徒)から製糖の技術を学んだヨーロッパ人は、大西洋諸島でみずから砂糖生産に乗り出した。

さらにコロンブスは、第2回の航海の時にサトウキビの苗をアメリカ大陸にもたらし、これ以後、カリブ海諸島やブラジルを中心に多くの黒人奴隷を用いた大規模な砂糖プランテーションが開始された。

アメリカ大陸で生産された黒褐色の粗糖は、イギリスのリヴァプール、オランダのアムステルダム、フランスのマルセイユなどの港町に運ばれ、ここで同じ円錐形の土器を用いて白砂糖に精製されたのち、各地に売り出された。

砂糖の名前は
どこから？

ペルシア語	シェカル	shekar
アラビア語	スッカル	sukkar
フランス語	スュクル	sucre
英語	シュガー	sugar
ロシア語	サハル	caxap

● コーヒーと砂糖の出会い

コーヒーを飲む習慣は、15世紀頃にアラビア半島南西部のモハ(モカ)で始まった。はじめは薬用や眠気覚ましの飲み物で、一時はイスラーム法に反するとして禁止されたこともあるが、



円錐形の土器
(ウブルージュ)

イスタンブルのコー
ヒー店に集う人々



しだいに人々のあいだに広まり、16世紀半ばにはオスマン帝国の首都イスタンブルにもコーヒー店が開かれた。ある年代記は、その様子をつぎのように述べている。

[シリアから2人の男がやってきて]それぞれ大きな店を開き、コーヒーを売りはじめた。物見高い酔狂な人々、とくに文人たちが多くそこに集まるようになった。そして、それぞれの店に20、30余りのサークルができ、ある者は書や詩集を読み、ある者はバックギャモンやチェスに興じ、ある者は自作の詩をもちこんで才能を披露した。

17世紀になると、カイロやイスタンブルにならってロンドンやパリにもコーヒー店が出現した。パリについては、1669年にルイ14世の宮廷に派遣されたオスマン帝国の使節が伝えたともいわれる。18世紀以降、砂糖入りのコーヒーは大衆化の一途をたどり、コーヒーの需要が高まるとともに生産地も世界各地へ拡散した。

日本にコーヒーを伝えたのは長崎・出島のオランダ人といわれ、明治になると文明開化の風潮のなかで徐々に受け入れられるようになった。

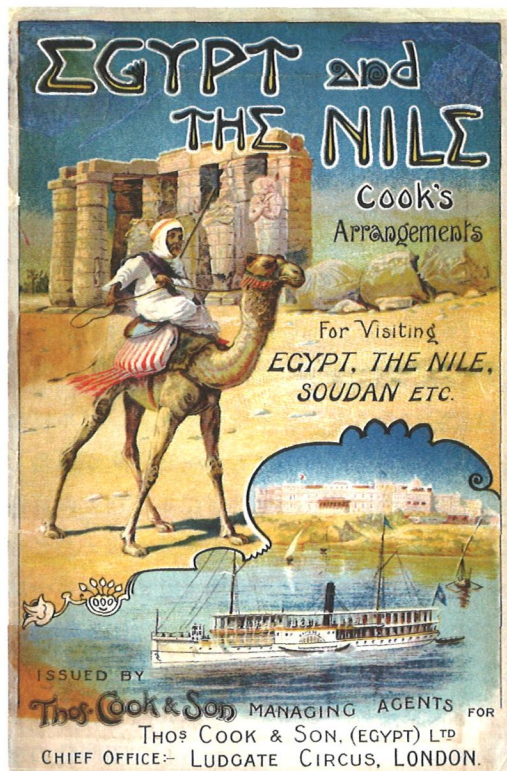
Q▶ このように、私たちがよく口にしているものには、長い歴史と世界的な広がりをもつものがある。ほかにも身近なモノにどのような歴史があるか、調べてみよう。

余暇からみえる現代世界

▶ 余暇の定着と拡大、多様化は、私たちの日常生活をどのようにかえたのだろうか。

● 余暇の時間

5 余暇とは、仕事(労働)や学習(教育)などのように、国家や企業などから与えられた義務を果たすために使う時間ではなく、それぞれの個人が自分の意志と選択で自由に過ごせる時間のことである。現在では、余暇よりも同じ意味の英語のレジャーを使うことが多くなっているが、



団体旅行の誕生 余暇の誕生とあわせて、鉄道の出現をはじめとする交通革命(→p.227)が、各地の観光やレジャーを楽しむ旅行を本格的に生み出した。イギリスのトマス=クック(1808~92)は、1851年のロンドン万国博覧会に際して初の団体旅行を企画して成功をおさめ、その後世界有数の旅行会社を築いた。写真はエジプト旅行のポスター。

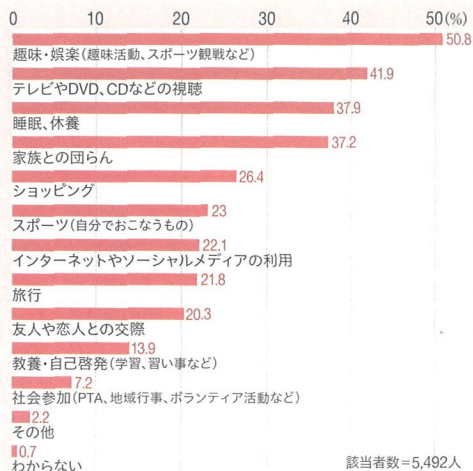
それは余暇が比較的新しい観念で、その意味や内容も時代の状況にそくして変化しているからである。

● 余暇の誕生

余暇は、近代以前の社会では何もしないことが許されている時間のことで、王侯・貴族や一部の^{きょうじゆ}上級市民層だけが享受できる一種の特権であった。余暇が市民層や一般庶民にも意識されるようになったのは、19世紀前半の産業革命以降である。^{→p.207}機械が生産過程の主役になるにつれ、労働者は利潤や効率の追求優先のもとで、長時間のきびしい労働を強いられた。工業化が進行すると、労働者の生活環境や健康状態も悪化し、深刻な社会問題になった。こうした状況を改善するため、労働運動は企業や政府に労働時間の短縮や余暇時間の確保を要求するようになった。やがて世論も支持するようになり、主要工業国



8 時間労働制のポスター 写真はフランスのある労働組合連合のポスターで、労働時間の8時間制をもとに戻そうとする雇用者側(右)と阻止する労働者側の対立を示している。



現代の日本における自由時間の過ごし方(内閣府「国民生活に関する世論調査(2019年6月調査)」より作成)

では労働時間は徐々に短縮され、19世紀末には10時間労働が広まった。さらに第一次世界大戦後には、1日8時間労働・週48時間労働が国際的にも望ましい規準とされた。

● 余暇の拡大と変容

日本では、第二次世界大戦後にこの規準が法的に認められ、さらに高度経済成長期後の1980年代に週休2日制・大型連休の設定・長期休暇制度が導入されて週40時間労働になり、2002年には公的教育機関でも週休2日制になった。この結果、現在では余暇は広く国民一般に共有されている。労働時間の短縮と余暇時間の拡大は国際的にも共通した傾向で、いまや先進国では労働時間は週40時間以下が普通であり、EU諸国では1年の休暇日数も1カ月以上が多い。

それと並行して福祉政策全般が拡大・進展したため、余暇はもはや疲労回復や健康保持を主目的とする休息(息抜き)時間ではなくなり、独自の目的や意味をもち、多様な内容を展開する自由時間へと変容している。1日24時間を、①



災害ボランティアセンター 大規模な自然災害時には、災害救援や復旧支援のためのボランティア活動が重要な役割を果たすようになった。写真は2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災後に設置された岩手県陸前高田市の災害ボランティアセンター。

睡眠・食事など生理的な必要時間、②労働(学習)のための時間、③「身体と心を休める」時間すなわち余暇、という3分割の構成モデルとすると、①は大きな変化はないものの、②は短くなり、③の余暇時間は増え、不可欠の時間帯になっているし、長期休暇も普及している。

● 余暇の多様化

それでは、余暇はどのように多様化し、活用されているのだろうか。現在、余暇はスポーツや旅行、見学など多くの分野に活動を広げている。さらに近年では、個人の趣味や娯楽の枠におさまらない領域での活動も注目されている。地域での交流活動や自然保護活動、福祉などの社会活動、災害支援のボランティア活動など様々なあり、それらは地域社会の活性化や国際的な交流運動の支援にも貢献している。

Q▶ 近代以前は余暇をどのように過ごしていたかを調べてみよう。また、興味のある身近な余暇の活動例を取り上げて、余暇の意味を考えてみよう。

歴史のなかの家族

▶ 今日の社会で一般的とみられている「家族」像は、どのような特徴をもち、どのように生まれてきたのだろうか。

● ホームドラマと家族観

1950年代末から日本で普及しはじめたテレビは、1960年代から70年代初めの高度経済成長期に、お茶の間での家族団らんの中心になった。そのなかで人気を得ていたのは家族の日常を描くドラマで、「ホームドラマ」という和製英語も、この時期に広く使われるようになった。現在年配の人ならば、豊かで民主的な家庭を描くアメリカ製のドラマや、大家族の悲喜こもごものエピソードを描く日本のドラマをなつかしく思い出すだろう。この時期は、日本の家族のあり方が大きくかわった時代であった。

第一に法律上、明治民法(1898年)以来の家制度が廃止され(1947年)、夫が戸主として妻や子どもに対してもつ強い管理権や、子どもの一人

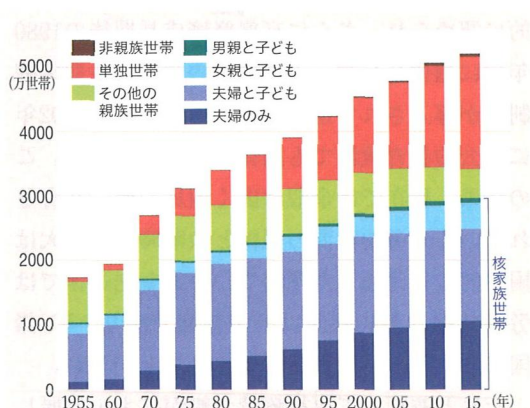
(多くは長男)が家を継ぐといった規定もなくなった。第二に、都市で雇用されて働く人々の増加とともに、両親とその子どもからなるいわゆる「核家族」が増え、また、出生率の低下にともない、「少なく生んで大事に育てる」子ども中心の家族観が広まった。若い夫婦は上の世代の干渉から解放されたが、それは、子育てや家事の手助けを失うことでもあり、多世代同居のにぎやかな大家族への郷愁もそこから生じてきたのである。

● 近代的な家族モデル

第二次世界大戦後の日本で普及したこのような家族の形は、歴史上、どのように生まれたのだろうか。19世紀に産業化が進んだ西欧では、労働者の場合は妻も子どもも外で働くことが多



アメリカのホームドラマ 大型家電製品のある広い家や、子どもたちの意見を尊重する両親の姿は、アメリカの家庭的理想的イメージを戦後の日本人に伝えるものだった。写真は、ドラマ「パパは何でも知っている」(日本では1958～59年放映)より。



戦後日本の家族類型別世帯数の推移(人口統計資料集(2020)より作成) 戦前にも長男以外は核家族を形成する機会が多かったこと、また最近では単独世帯が増えていることからすると、世帯全体のなかでの核家族世帯の割合は、長期的にはそれほど増えているわけではないという見解もある。



女王一家のクリスマスの団らん
19世紀のイギリスでは、夫婦が愛情をもって子どもをいつくしむ家族の姿が、中流階級にとっても理想となった。絵入り新聞などで報道されるヴィクトリア女王(→p.228)の生活様式は、そのモデルとなるものであった。



工場で働く女性たち イギリス、マンチェスター近郊の工場で働く女性たちが、昼休みをしている様子。19世紀後半。

く、近隣や仲間集団の付き合いが大事であったのに対し、富裕な階層では、夫は外で働いて収入を得て、妻はメイドを使ってもっぱら家事・育児にいそしむという性別分業が進んだ。家族の絆を重視するとともに「男は仕事、女は家庭」という分業観をもつこの家庭像は、日本でも明治以降、軍人・官僚や会社の管理職などエリート階層に広まり、それとともに、家事と育児をかしこくおこなう女性の育成をめざす「良妻賢母」思想が提唱されるようになった。戦後になると、民主化の動きのなかで、家庭内での父親の権力は弱まったが、「男は仕事、女は家庭」の考え方は、核家族化とともに広範な階層に普及したのである。

現在、そのような家族のあり方は、世界的に大きく変わりつつある。共働きの家庭が増え、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担の意識は薄れてきた。さらに、個々人の様々な選択が可能になるなかで、婚姻届を出さないパート

ナー関係や、同性のカップルなど、多様な形態の結びつきは珍しいことではなくなっている。婚外子(法的に結婚していない男女のあいだに生まれた子)の権利の保護や、同性結婚の承認をめぐる、各国の法律も新しい状況に対応した変化をみせている。

● 世界史のなかの家族

しかし、歴史を振り返ってみるならば、時期や地域によって、家族のモデルやその実態はもともと多様であったといえる。男女が結婚しても一緒に住むとは限らず、父子関係・母子関係のどちらが強いともいえない地域も多かった。古代の日本では、結婚は男性が女性の家に通う形で始まり、夫婦がみずから家をもつようになって、生業や財産、子どもの養育などについて、女性の発言力は強かったと考えられている。日本を含め、東アジアの伝統的な家族の特徴が男性支配の強い父系制とみなされているの



馬に乗ってボロ競技をする女性(8世紀前半) 唐代の墓に副葬された陶製の人形のなかには、女性の乗馬姿を描くものも多い。

は、早期に父系社会が形成された中国の家族制度が模範とされ、その影響がしだいにおよんだことによるところが大きい。しかし、中国の歴史においても、女性が家庭の外で活発に活動した隋唐時代や、儒教道徳のもとで良家の女性は表に出ないものとされた宋代以降など、時代によって変化がみられた。

家族のあり方は、社会全体の仕組みとも関わっている。近世の日本では、家の職業を受け継ぐことが当然とされていた身分制度のもと、

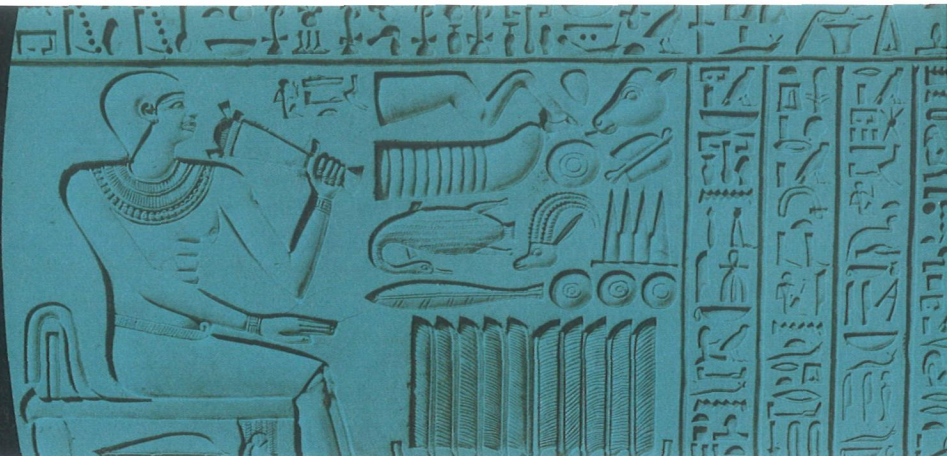
「家」の目的は家業を存続・発展させることであり、そのためには、年老いた父が家長の地位を働き盛りの息子に譲ってその指図を受けることも多かった。固定的な身分制度は、人間平等の考え方とあい反する「封建的」なものともみなされがちであるが、必ずしも父親の権力の絶対性とは結びつかなかったといえよう。

一方、古代ギリシアの民主政の担い手となった市民は、妻子や奴隷に対して強い家長権行使する男性であった。だれにも干渉されない家の君主のような立場であればこそ、たがいのあいだでは独立した人間同士の平等な関係を築くことができたのである。

Q▶ 小説やドラマ・アニメなどに描かれる家族像は、当時の家族のあり方をどのように反映し、または理想化したり批判したりしているのだろうか。人気を呼んだ様々な作品から、作者や読者・視聴者の家族観を読み取ってみよう。



アムステルダムのパレード 同性結婚の承認を最初に法制化したオランダ(2001年施行)をはじめとして、同性結婚を認める国はしだいに増えている。写真は、運動の象徴である虹色の旗を掲げ、性的少数者の平等を祝って毎年おこなわれるパレード。



諸地域の歴史的特質の形成

第 I 部では、古代文明や諸地域の歴史的特質が形成されていく過程とその多様性を学ぶ。およそ1万年前頃から、地球上の各地では、それぞれ異なる自然環境のもとに様々な文明が誕生し、ときにほかの文明とも関係をもちながら展開した。こうした古代文明の成果を背景に、ユーラシア大陸やアフリカ大陸、アメリカ大陸の諸地域では、社会・宗教・文化などの多様な歴史的特質が形成されていくことになる。



アケメネス朝・ペルセポリスの宮殿跡

古代文明や諸地域の歴史的特質とは何だろうか？

第I部では、各地の古代文明や諸地域の歴史・特徴を個別に学んでいく。一方、それらを別の視点から読み解くと、地域ごとに異なる点や事例をまたいで共通する点も見出すことができる。その視点は、生業、身分・階級、王権、宗教、文化・思想など様々に考えられるだろう。ここではその一例として古代の西アジアに注目し、多様な身分・階級が生まれた背景やその役割、王権と宗教の関係などについて考えてみよう。



A 農作業をおこなう古代エジプトの農民たち(新王国時代の墓の壁画) 農民たちはどのような作業をおこなっているだろうか。また、右端に大きく描かれている人物は何をしているのだろうか。

A・Bの資料からは、当時の人々の生活について、どのようなことが読み取れるだろうか。

B シュメール人による農作業の手順(前18世紀～前17世紀) 古代メソポタミアの農民たちはどのような負担を負っていたのだろうか。

お前が畑に灌漑をする準備をしなければならぬ時には、運河の土手や畑のでこぼを取り除くために調べなければならない。お前が畑に水を入れた時、その水をあまり高くならないようにせよ。水が引いて畑が出て来た時には、畑の澁んだ地点を調べ、そこは囲いをせよ。牛に畑を踏ませよ。雑草を処理した後で畑の輪郭を決め、そこを何度も3分の2マナの重さの薄い鍬で均せ。平たい鍬で牛の蹄跡を消し、[畑を]きれいにせよ。

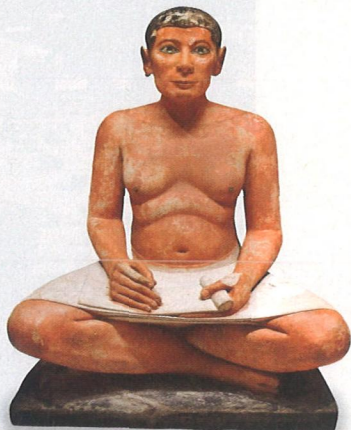
(歴史学研究会編「世界史史料1」)

ドゥアケティという名のシレ(地名)の男が、ベビという名の息子に与えた教訓の始まり。その時、彼は、その息子を王都でもっともすぐれた学校に、貴族の子供たちと一緒に入学させるために、王都に向かって船で南へと行くところだった。そして彼はベビに言った。「私は鞭で打たれる者を見た。お前は、その心を書物に向けるべきだ。労働者として人が連れ去られるのを見なさい。書物に勝るものはない。それは水上の船だ。ケミト(書記教育の教科書)の終りを読みなさい。そこにはこの言葉がある。曰く、「書記は王宮のどんな地位にあっても、そこで困窮することはない」。

(歴史学研究会編「世界史史料1」)

C はどのような目的で書かれたのだろうか。また、書記と呼ばれた人々はエジプトでどのような役割を担い、ほかの職業と比較してその社会的な地位はどのようなものであったと推測できるだろうか。

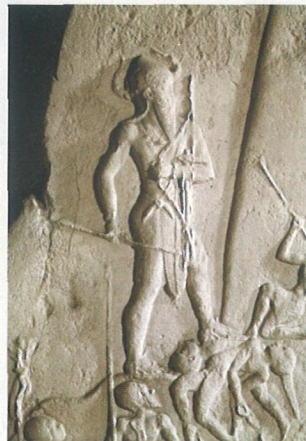
C エジプト・中王国時代の「ドゥアケティの教訓」(前19世紀後半)と書記座像(古王国時代)



前7000頃	前3000頃	前2650頃	前2370頃	前2000頃	前1900頃	前1700頃	前1650頃	前1550頃	前1500頃	前1300頃
● 農耕・牧畜の開始	● エーゲ文明おこる ● シumer人 ^{シュメール人} がメソポタミアに都市国家を築く ● エジプトに統一国家	● エジプト・古王国時代	● アッカド人 ^{アッカド人} がメソポタミアに統一王国	● クレタ文明おこる ● エジプト・中王国時代	● バビロン第一王朝の成立	● エジプト・ヒクソスの流入	● ヒッタイト人がアナトリアに強力な国家を建設	● エジプト・新王国時代	● ミケーネ文明おこる	● アブ＝シンベル神殿建設

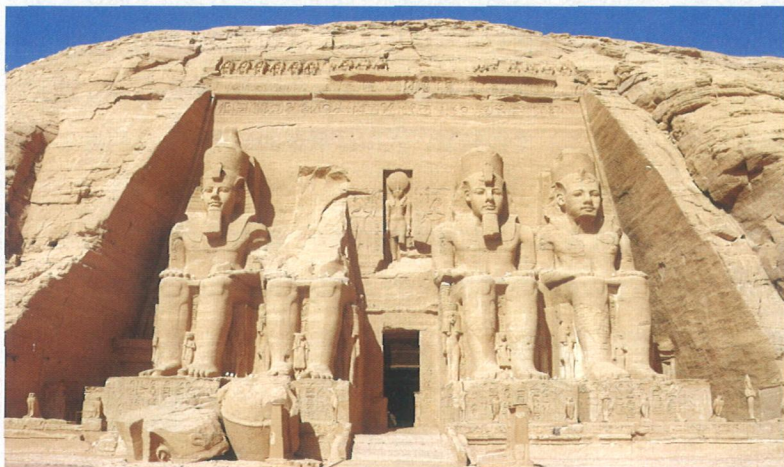
古代の西アジア・東地中海地域のおもなできごと

強き王、アッカドの王ナラム＝シンは、四方世界が彼に反乱した時、イシュタル神が彼に示した愛によって、1年で9つの戦いに勝利した。そして彼ら立ち上がった王たちを捕らえた。彼が彼の町の基礎を危機から守ったことを見て、彼の町[の人々]は、エアンナのイシュタル神、ニップルのエンリル神、トゥトゥルのダガン神、ケシュのニンフルサグ神、エリドゥのエア神、ウルのシン神、クタのネルガル神に、彼をして彼らの町の神となるように願った。そして彼らは、アッカド市の中に彼のための神殿を建立した。(歴史学研究会編『世界史史料1』)



D から、それぞれの町(都市国家)と神、また王と神は、どのような関係であったと考えられるだろうか。

D アッカド王国・ナラム＝シン^{ナラム＝シン}の碑文(前18世紀～前17世紀)と戦勝記念碑 上は古代メソポタミアの都市国家を統一したアッカド王国の最盛期の王ナラム＝シンの碑文。右はナラム＝シンが近隣の民族を征服した際の記念碑(部分)。



E アブ＝シンベル神殿 紀元前13世紀頃にエジプトの王(ファラオ)ラメス(ラメセス)2世により造営された、太陽神ラーを祭神とする岩窟神殿。その入口には、青年期から壮年期までのラメス2世を模した、4体の巨像がおかれている。

E のような巨大な建造物は、どのような人々によって建てられたのだろうか。また、なぜこのような事業が可能であったのだろうか。

- Q1** 西アジア以外の地域では、どのような身分の人々が統治をおこなったのだろうか。また、統治者と宗教はどのような関係にあるだろうか。
- Q2** 資料に対する疑問や興味、または関心のある視点にもとづいて、自分自身で第I部への問いを立ててみよう。